

# 『モイラ』の中の秘められた物語（2）

井上三朗

## 目次

0. はじめに
1. サイモンの物語
2. モイラの物語
3. **プレローの物語**
4. おわりに

（太字は今回掲載分）<sup>22)</sup>

### 3. **プレローの物語**

こんどは、プレローの物語を概観することにしよう。プレローとジョゼフとの出会いの場面は、第一部第三章に置かれている。この場面をプレローの視点からながめることにしたい。デア夫人の下宿の食堂にプレローが登場するところは、次のように語られている。

「見知らぬ男〔プレロー〕は周りをぐるっと見渡し、ジョゼフの顔に視線を走らせてから、最後はうつむき、皿をじっとみつめた」(p.11)。

この文でプレローがジョゼフの存在に気づき、うつむいている点が注意をひく。このあとプレローは同じ体勢で食事をする。ジョゼフがプレローに友情をいだき、「あの青年が出ていくために席をたったとき、彼のところに行こう」(p.11)と考えているあいだ、プレローはあたかもジョゼフの視線を避けるかのように、うつむいて食べるのである。

「明らかにその未知の男は、そっとしておいてもらうことを望んでいた。彼は顔もあげずにせかせかと食べていた。見たところ、食事をすませ、この部屋を出ていくこと

を急いでいるようであった。事実彼はデザートを呑み込むか呑み込まないうちにもう立ち上がり、サイモンとジョゼフとに等しく送られたかのような、あるかないかのほほえみを浮かべて出て行った。足音が控え室で、次いでヴェランダで響いた。そしてヴェランダの鉄格子の戸が彼の背後で、銃器のような鈍い音を立てて閉まった」(p.11)。

プレローが食事をすませることを急ぎ、一刻も早く食堂を立ち去ろうとしていることは一目瞭然である。それはなぜか。この点にかんして、プレローが帰っていく間際、隣りあって席についているサイモンとジョゼフとにわずかな微笑を投げかけていることは無視できない。プレローは食堂に入ってきたときと同様、食堂を出ていくときにも、ジョゼフに注目しているのである。とすれば、プレローは食事中、ジョゼフのことをずっと意識していたことになるのではないだろうか。ここから、プレローはジョゼフを避け、ジョゼフからのがれるためにそそくさと夕食を終え、立ち去るのだとみなすことができるのである。このことは、プレローがジョゼフの到着の日まではデア夫人の下宿人でないにもかかわらず、夕食の際の常連であったのに、その日かぎりデア夫人のところにはやってこなくなることから明白であるし、また、第一部第五章で、決闘のあとプレローがジョゼフに、「君は、ぼくがデア夫人のところでもう食事をしていないことに気づいたはずだ。(…)それは君のせいなんだ」(p.26)と言っていることからもちかめることができる。そして先に引用した一節のさいごの文に述べられているように、ヴェランダの「鉄格子の戸」が閉まるときの「銃器のような鈍い音」は、ジョゼフにたいする訣別の意思表示がこめられたものとうけとることができるのである。

このように、プレローはジョゼフとはじめての出会いの折、ジョゼフを忌避する。いったい、それはいかなる理由にもとづくのだろうか。プレローの忌避の姿勢は、当然のことながら、ジョゼフへの反撥の感情に根ざしている。しかしながら、物語のその後の展開を考えあわせるとき、この反撥は執着の裏返しのあるわれにほかならない。デア夫人の下宿からの、プレローの早急な出発は、愛からの逃亡を意味するであろう。ジョゼフとの邂逅によって不可避的に芽ばえた情熱をこののち空しく、報われることなく、また理解されることもなく生きなければならぬこと、要するに、不可能な愛ゆえの苦悩を瞬時のうちに直観したがゆえに、プレローはジョゼフを避けて立ち去るのだと思われるのである。サイモンのジョゼフにたいする愛がそうであるように、同性への愛が理解しがたいものであり、大抵の場合、不可能なかたちをとることはことわるまでもない。そうであるならば、己れの不毛な愛を自覚したとき、その愛から、そしてその愛の対象から

できるだけ早く遠ざかることが、かぎりない苦悩と絶望の深淵におちいらないようにするための唯一の手だてなのだ。プレローの出発はこのように理解することができる<sup>23)</sup>。とはいえ、プレローにとって、ジョゼフとの出会いは、サイモンの場合と同じく、自己を、愛する人間にどうしてもなく変貌させたという点で、宿命的なものであると論定することができるのである。

次に、第一部第四章の、プレローの挑戦を分析することにしよう。ジョゼフとの出会いの日から数日後、大学構内でジョゼフが赤毛のせいで、学生たちから揶揄されているとき、すなわち、「諸君、君たちの中で誰か、この界限にいる消防夫たちの住所を知っているだろうか。彼らに知らせておくのが賢明な用心だと思うが」(p. 14)といった冗談を浴びせられたとき、学生たちの中に混じっていたプレローはジョゼフに攻撃的な態度をとる。「今のことばを言ったのは君か？」(p. 14)とジョゼフに問いかけて、プレローはこう対応している。

「プレローはまず相手の顔を、それから肩を、さいごに足もとをしげしげとながめた。そしてこの検査がおわると、冷やかな口調で言いはなった。

——ほくじゃない。でも責任はとるよ。気にいったから」(p. 14)。

プレローは自分が口にしたのでもない冗談の責任をとり、「気にいった」と言ってジョゼフにいどみかかっている。プレローの攻撃的姿勢は、ジョゼフを見くだすような態度、口調の冷淡さからも読みとれる。そしてプレローはジョゼフに挑戦状をたたきつけるかのように自分の住所を知らせ、ジョゼフを決闘にいざなうのである。

「ほくに会いたいと思っている方々へ知らせておこう。ほくは東アーケード街四十四番地に住んでいるんだ」(p. 15)。

プレローのこうした挙動はどのように解するべきであろうか。まずプレローの攻撃的な言動は、自己のうちに生じたむなしい、理解されない愛の情熱からの、あるいはこの情熱の苦悩からの、絶望的な脱出のくわだてだとみなされよう。ちょうどサイモンの、死にいたる行為がそうであったように。だが同時に、プレローの挑戦は愛の対象への接近のこころみの価値をも有しているように思われる。というのも、自分の愛が同性への愛であるがために、相手の理解を越えた不毛なものであると確信するとき、愛のまともな告白は不可能であるし、無意味である。このような場合、愛する相手に接近する道はせいぜいのところ、愛する相手を挑発し、怒りをかきたてることによって、自己の存在をアピールすることだけであ

るからだ。この点、プレローのふるまいは、同性愛の禁じられた性格を浮き彫りにしつつ、小説『モイラ』のあとに書かれた劇作『南部』（1953）の中のイアンの行為を彷彿とさせる。『南部』において、ポーランド生まれの陸軍中尉イアンは、アメリカ南部出身のエリックと宿命的な出会いを体験する。この出会いによって、イアンは自分が一生涯、秘密と沈黙のなかで不毛な情熱をいだいて生きなければならないことを悟る。イアンはエリックにたいする不可能な愛の苦悩からのがれるために、エリックをわざと侮辱し、決闘にかり立て、そして決闘に際してはなんの抵抗もこころみることなく、相手の剣に胸をつらぬかれて果てるのである。

『モイラ』におけるプレローの挑戦が、『南部』のイアンのこうした絶望的な行動と類似していることはまちがいない。グリーンはイアンの挑戦を「偽装された告白」<sup>24)</sup>と解釈している。プレローの敵対的行為もまた、同様の意味をもつであろう。つまりそれは、屈折した、一種の告白のこころみなのだ<sup>25)</sup>。また、プレローはさいごに自分の住所をジョゼフに知らせている。この行為は理解されないとはいえ、愛のまねき、愛へのいざないという意図をふくんでいると思われるのである。

プレローの挑戦によって、プレローとジョゼフは決闘することになる。その決闘の場面が置かれている第一部第五章を検討することにしよう。ジョゼフはプレローの住まいを訪ねる。あいにくプレローは留守で、プレローの帰宅を待つ。プレローがもどってくる。プレローはジョゼフを部屋のなかに招き入れ、服を着かえながら、「君が来るかどうか考えていた（…）。ぼくは来ないと思っていたよ」（p. 22）と話す。この言葉から、第一部第四章の挑戦以後、ジョゼフのことがプレローの脳裡をしめていたこと、ジョゼフがプレローの意識を支配してきた存在であることが察知される。ところがジョゼフは、プレローの落ち着きはらった態度を自分にたいする軽蔑とうけとって逆上し、やにわに、プレローの締めているネクタイをつかみ、プレローに襲いかかろうとする。そこでプレローは、「ここで殴りあうわけにはいかない」（p. 22）と言ってジョゼフをいなし、決闘の場所におもむくために、部屋の外にジョゼフを連れ出し、部屋に鍵をかける。このくだりは次のように記述されている。

「しばらくたって（…）、二人が部屋を出て、プレローがドアを自分のほうにひき寄せて二重鍵をかけてドアを閉めようとしたときに、ジョゼフは、彼があまりにも不器用に鍵を用いて手探りしているのを目にしたので、もっとそばから観察しようと近づいた。するとそのとき、驚いたことに、プレローの手がかなりひどくふるえているのに気がついた。それで本能的な遠慮の気持ちから彼はあとずさりした。まるで見てはな

らないものを見てしまったかのように」(p. 23)。

上の一節で、プレローの手がふるえている点は注意を払うべきである。プレローの手の震えは、何よりもまず、ジョゼフの凶暴さ(violence)におじけづいたことに起因していると思われる。けれども、プレローの恐怖が単なる臆病さ、勇気の欠如を意味するのではないことはたしかであろう。プレローにとって、ジョゼフとは愛の対象なのだ。プレローの恐れは、愛を前にしてのおののきともみなすことができるのではないだろうか。ジョゼフを誘惑するためにやってきたモイラが、さいごの局面で愛の恐怖をいただくように、プレローは挑戦によってジョゼフを愛にまねきながらも、ジョゼフすなわち愛の思いがけない出現のために戦慄をおぼえたのだと考えられるのである。

このあと、二人は池のほとりて決闘する。以前明らかにしたように、ジョゼフはプレローに突然飛びかかり、性的・肉体的なよろこびを一定程度あじわう<sup>26)</sup>。二人の格闘の場面は、作者グリーンが解釈するように、「ラヴシーン」(une scène d'amour)なのである<sup>27)</sup>。そしてたたかいののち、二人は別れることになるのであるが、その間にプレローはジョゼフのもとめた握手をこぼんで、こう言いのこしている。

「ともかくぼくはもう君と会いたくない。そしてもう話しあわないことにしよう。もし万一ぼくらが顔を合わせることがあるとしてもだ」(p. 26)。

プレローはジョゼフに絶交あるいは訣別の意思表示をしている。それはなにゆえであろうか。「君は人殺しだ」「君のなかには人殺しがひそんでいるんだ」(p. 26)とプレローがジョゼフに言いはなっているように、ジョゼフを殺人者にしてしまいかねない彼の《violence》への恐怖から、プレローはジョゼフに会うまいとするのであろうか。そうではないように思われる。ジャック・プチは、プレローのこの態度を「愛を前にしての逃亡」(une fuite devant l'amour)と解釈している<sup>28)</sup>。この解釈は妥当であろう。プレローは自らの不可能な・理解されない愛の情熱からのがれたい、己れのむなしい執着の感情を断ち切りたいという願いをこめて、絶交・訣別を宣言するのだ。はじめての出会いの際の早急な出発がそうであったように、この宣言は絶望的な愛からの、そして愛の苦悩からの脱却のこころみとうけとれるのである。

とはいえ、第一部第五章の決闘の場面のあと、プレローはジョゼフの視界から、作品から、完全に姿を消さるわけではない。プレローはこののちもしばしば作品に登場し、ジョゼフとかかわりをもつことになる。第一部第八章において、ジョ

ゼフが大学の図書室で『ロメオとジュリエット』の本を読んでいるとき、プレローがジョゼフの存在に気づき、背後からジョゼフを観察するところがある。

「四時ごろ、誰かがジョゼフの読書している小閲覧室の前を通りすぎたが、ふと立ちどまる様子をみせると、一瞬ためらい、また歩きつづけた。それから引き返して、身じろぎもしない学生の少しうしろに立ちどまったまま、注意深いまなざしで学生を観察しはじめた。それはプレローだった。数分のあいだ、彼は身動きもせずじっとしていた。そしてジョゼフがほんのちょっとでも動いたらすぐさま退散するような恰好でいた。(…)誰にも見られていないことをたしかめるために、まず周囲に一瞥を投げてから、彼は少し頭を前にかたむけ、ジョゼフがかくも一心不乱に読みふけている書物の表題を、肩ごしに読もうとした。ほとんど見えるか見えないくらいの微笑がプレローの口もとから目まで浮かんだ。しかし彼はすぐさま真剣な様子にもどると、異常な好奇心と怒りを抑えたような表情とが同時にうかがわれるまなざしで、本を読んでいる青年を凝視した。待ち伏せしている獣のように、息をとめ首をのぼしているそうした彼の姿を見ると、まるで相手をなぐるのに都合のよい時期をうかがっているかのようであった。しかし頁をめくろうとしてジョゼフが身ぶりをしたはずみに、この隠れた観察者の両肩に身ぶるいが走り、彼は姿勢をただして消えうせた」(pp. 40-41)。

このくだりで、プレローはまずジョゼフの姿をみとめて、立ち去るべきかどうかためらっている。結局、プレローは踵を返してジョゼフに近寄ることになるけれども、このためらいは、プレローのジョゼフにたいする、断ちがたい執着の感情をかいま見せているように思われる。それから、プレローはジョゼフが読みふけている本に並々ならぬ関心をよせている。この関心は、書物の表題をジョゼフの肩ごしに読もうとする仕草や、「異常な好奇心」(une curiosit   extraordinaire)がまなざしにうかんでいるところから瞭然である。そしてその関心はジョゼフその人にたいするものにほかならず、とどのつまりジョゼフへの彼の愛をうかがわせている。また、プレローの視線に、「怒りを抑えたような表情」(une sorte de fureur contenue)がみられること、さらに、プレローが「待ち伏せしている獣」になぞらえられ、ジョゼフを観察する彼の様子が、「まるで相手をなぐるのに都合のよい時期をうかがっているかのようであった」という表現でとらえられている点は看過することができない。プレローはこのとき、ジョゼフへの暴力の欲求にかりたてられ、獲物をねらう怒ったけだもののごとき存在と化している。プレローのこうした変貌は、ジョゼフへの愛の欲望を露呈しているのではないだろうか。というのも、怒りと暴力の欲求は、ジョゼフの場合がそうであったように、肉体

的な欲望あるいは情熱の屈折したあらわれであると考えられるし、プレローが獣的な存在に変身するのも、欲望の対象に直面したからだともみなすことができるからである。かくして、この図書室の挿話においてもまた、プレローのジョゼフにたいする情熱をしかとみてとることができるのである。

プレローは第二部第十一章においても登場する。ジョゼフは近代英語の授業、シェークスピアにかんする講義のかわりに、中世英語、チョーサーの講義をとる。そして二度目の授業に出た際、プレローの存在に気づかされるのである。ジョゼフが教室にはいって席につくところを引用することにしよう。

「ジョゼフが授業を変えてからこの教室へはいるのは、これで二度目だった。が、前に坐った自分の席がみつからなかった。やや行きあたりぼつたりと彼は一人の学生の横に腰かけた。しかし取り乱していたので、その学生が誰だかわからなかった。だが学生はすぐに立ち上がり、教室の奥のほうに行ってしまった。しばらくがやがやと騒ぐ音がきこえた。そのあと、ジョゼフの横の空いた席には、ずんぐりとした、陽気な若者がすわり、隣りにいるジョゼフを脇でつついた。

——君はぼくの席をとってしまった、と彼は言った。そんなことどうでもいいことだけれど、でも今、ぼくのいるところはプレローの席なんだ」(p.124)。

若者<sup>29)</sup>のこの言葉から、ジョゼフが席についたとき、すぐさま立ち上がり、ジョゼフから離れた学生がプレローであることがわかる。前章(第十章)において、ジョゼフはモイラと出会っており、この時点でジョゼフの脳裡を支配するのは、プレローではなく、モイラである。したがって、「プレローがいようとしまいと、そんなことがなんの意味をもつのだろう」(p.125)と考えているように、プレローの存在はジョゼフにとって重要性をもたない。しかしながら、プレローにおいては、事情はことなる。プレローにとっては、ジョゼフは近づいてはならぬ存在なのだ。なぜならプレローは相変わらずジョゼフを愛していると推測されるから。つまり自らの愛の不毛性・不可能性を痛感し、また愛の苦悩のむなしさ・報われなさを知りつくしているがゆえに、プレローはジョゼフを避けるのだと思われるのである。この点において、第二部第十一章のプレローのこの反応は、第一部第三章の、ジョゼフとの出会いの際の、彼の忌避の姿勢に通底するといえよう。

プレローは第二部第十四章においても出現する。この章は、ジョゼフがデーヴィドと通りを歩いているとき、偶然モイラと出くわす事件を語っている。だが同時に、ジョゼフがプレローを目撃する挿話もふくませている。ジョゼフがデーヴィドとともに授業をうけるため、教室に行こうとしたとき、プレローと不意にすれ

ちがうのである。

「二人[ジョゼフとデーヴィド]は柱廊に通じる階段をだまって上がった。そしてジョゼフが扉を押そうとしたとき、それは内側からひらき、中から出てきたプレローとあやうくぶつかりそうになった。日焼けした顔の頬のところに血がのぼり、そのため黒い瞳のきらきらした輝きはますます強烈になるばかりにみえた。空気は冷たかったのに、わざとらしいぞんざいさで襟を開いたままにしているワイシャツから首筋をのぞかせていた。体をかわすように肩をゆすり、首をうしろにそらすその態度には、わずかながらも挑戦の姿勢がみられた。けれどもジョゼフを見たとき、彼は後ずさりしようとした。が、すぐに毅然とした態度をとりもどし、長い芝生の向こう端にある図書館の大時計をじっとみすえながら、彼のまえを通り過ぎていった。ジョゼフは彼の行くほうに顔をむけ、しばらく彼のあとを目で追わないではいられなかった」(p.140)。

この場面において、プレローが頬に血をのぼらせていること、プレローの態度にわずかとはいえ挑戦の姿勢がみられること、ジョゼフを見たプレローが後ずさりしようとしていること、また、そのあとプレローがジョゼフを黙殺して彼のまえを通り過ぎることが刮目に値する。ジョゼフに遭遇しての、プレローのこうした反応から、彼のジョゼフへの強烈な意識が読みとれる。この意識は、ジョゼフへの執着の感情と表裏をなすものである。プレローはここでもジョゼフを愛するがゆえに、ジョゼフを無視することで、彼を避けようとするのである。この忌避が不可能な愛の苦悩からの逃亡のころみとしてあることは、もはや繰りかえずまでもない。

このようにプレローは決闘以後、ジョゼフを忌避しつつ生きる。だが、小説の終わり近くになって、プレローはジョゼフの身をまもるべく出現することになる。新調の服を手に入れるに際してデーヴィドにたてかえてもらった金を返すために、簡易食堂で働いているとき、ジョゼフは学生たちの何者かによっていたずらをされる。その折、プレローが介入してくるのである。

「彼[ジョゼフ]がかなり危なっかしく傾いたお盆を手にして、調理場のほうに向かおうとしたとき、誰かが前掛けの紐をひっぱるような気がし、紐はほどけてしまった。彼は自分の肩越しに不安そうな視線を投げかけたが、あまりにたくさんの人たちがそばを行き来していたので犯人を見定めることができなかった。そのうちに、高飛車な声がきこえてきた。

——放つといてやれよ、と声は命じた。

ほとんど同時に、紐をつかんだ手が力強くそれを結びなおした。そしてジョゼフは、

人ごみのなかをプレローが遠ざかるのを見た。たった今耳にした声は、自分の敵が口にしたものなのだ。その誇らしげな顔は、他のすべての連中を圧倒しているように思われた。心ならずもジョゼフはしばらくのあいだ彼のあとを目で追うのだった」(II-19、p.155)。

強調した箇所からわかるように、プレローは学生のいたずらをはばみ、窮地におちいりそうになったジョゼフを助け出している。もっとも、プレローはジョゼフを救ったあと、ジョゼフとなんの言葉もかわすことなく立ち去っているのので、プレローが依然としてジョゼフを避けていることはまぎれもない。しかし、ここでプレローが学生のいたずら、同じことであるが、災いからジョゼフをまもろうとしていることは大事であろう。決闘ののち、ジョゼフはプレローにたいして怒りの感情しかいだかない。これにたいしてプレローは、絶交・訣別の意思表示をしながらも、ジョゼフに一貫して愛情をよせ、ついには、デーヴィドがはたせなかった〈守護天使〉の役割をになおうとさえするにいたるのである<sup>30)</sup>。

プレローがジョゼフの〈守護天使〉としての機能をはたそうとするという点については、学生たちの陰謀の実行をとどめようとするという事実からも明らかである。学生たちは、前にも述べたように<sup>31)</sup>、宗教に生きるジョゼフを物笑いの種にするため、モイラをジョゼフのところにやって、ジョゼフを誘惑させることをくわだてる。不吉なことが起こることを予感したプレローはこの企てを阻止しようところろみる。プレローは、のちに、ジョゼフがあやまちを犯したあと、ジョゼフにこう言っている。

「モイラのことだ(…)。だめだ、動いてはいけない。君は話を聞かなくてはいけない。あの女が君のところにきつと行くだろうことをぼくは知っていた。あいにく、誰もみながそのことを知っていたんだ。(…)

(…)

ぼくはあんなばかげた計画をやめさせようとしたんだ。ぼくは君の敵じゃないんだよ、ジョゼフ。だがモイラは君のところへ行くという凝り固まった考えをしていてね。そんなことをしたら悪い結果をまねくことはわかっていたんだが」(II-24、p.186)。

プレローの話のなかで、「ぼくはあんなばかげた計画をやめさせようとしたんだ」、あるいは、「ぼくは君の敵じゃないんだよ」という言葉が目につく。ここから、プレローがジョゼフの味方となって、学生たちの陰謀を流産させるべく行動していたことがわかる。このようにプレローはジョゼフを災いからまもる〈守護天使〉たらんとする。そしてプレローは、ジョゼフの犯罪ののちは、ジョゼフにはつき

りとわかるかたちでジョゼフに援助の手をさしのべる。第二部二十四章、ジョゼフを国外に逃亡させるために、ジョゼフの前にあらわれるのである。プレローは逃亡の段取りを説明したあと、ジョゼフに援助の申し出を受け入れるかどうかの決断をせまる。このときの二人のやりとりを見てみることにしよう。

「プレローは彼をじろじろと見た。

——ぼくは君の返事を待っている、と彼は言った。

(…)

——わかったよ、と彼 [ジョゼフ] はようやく言った。

プレローは目に見えてほっとした様子で彼に近よってきた。

——ぼくは大学にもどる、と彼は前よりもやさしい声でいった。(…)みんなの言うとおりにすれば、君は助かるんだ。ぼくは確信するよ、ジョゼフ。さあ握手してくれないか。今度は、ぼくが君に頼む番だ」(p.188)。

プレローがジョゼフの逃亡同意に安堵の表情をうかべていることから、彼が自己の実存をかけてジョゼフの国外逃亡を画策していたことが推察される。ではどうしてプレローは、ジョゼフの〈守護天使〉たらんと欲して、ジョゼフを外国へ逃がそうとするのであろうか。それは言うまでもなく、プレローがジョゼフを愛しており、ジョゼフに自由の身でいてもらいたいと願っているからである。そしてプレローは己れの愛の証しとして、ジョゼフに接近し、逃亡の援助を申し出るとされる。プレローがジョゼフの受諾を切実に望むのは、ジョゼフの逃亡受け入れが、プレローにおいて、自らの愛をジョゼフが受け入れることに等しいと認識されているからではないだろうか。このことは、ジョゼフの受諾のあと、プレローが、決闘直後にはこぼんだ握手を、今度は自分からもとめるという事実から看取することができる。それゆえ、逃亡援助の申し出は、愛の「偽装された告白」としての価値を有している。けれどもこの告白はあくまで「偽装された」ものにすぎず、全面的・正真正銘のものではない点にくれぐれも着目する必要があるだろう。プレローは、「どうして君はぼくを助けようとするのかい」と問うジョゼフに、「それは君には関係ないよ (Cela ne regarde que moi.)」と答えている (p.187)。プレローは、自分の真意をただすジョゼフを突きはなし、ジョゼフにたいする思いをかくしとおすのである。またジョゼフは、プレローと握手しているとき、決闘の日のことを思い出し、「君は、いつか君がぼくともう話したくない訳がたぶんわかるだろうと言ったね」(p.188)と語っているように、決闘直後のプレローの発言を問題にする。第一部第五章におけるプレローの絶交・訣別の宣

言は、彼じしんの愛とかかわりを持ち、この愛の苦悩からの脱出のころみであると解釈することができた。ところが、プレローは絶交を宣言した理由を明らかにしないのである。

「——今となってはもう遅すぎるよ。ほくらの歩む道はもう交わることはないだろうからね。

——ほくは知りたいんだ。

——その訳を言うことはぜったいにできないよ」(II-24、pp.188-189)。

このようにプレローは、ジョゼフの重大な問いかけにたいして沈黙をまもる。己れの愛を告白しうる絶好の機会であるにもかかわらず、内心の感情を打ち明けない。自己の愛を秘密にしたまま、ジョゼフと別れるのである。したがって、第二部第二十四章は、プレローがジョゼフに国外逃亡の援助を申し出る点で、愛の告白のころみの場面であるといえるが、同時に、自己の内面にかかわることがらについて徹頭徹尾口をとぎすという意味において、告白の不可能性を、ということはずなわち、愛の不可能性を決定的・最終的なかたちで浮き彫りにしているともみなしうるのである。

以上、ジョゼフとの宿命的な出会いから、挑戦と決闘、観察と忌避、〈守護天使〉としての登場、および告白のころみと断念を経て、別れにいたるまでの、プレローの内面のドラマをたどってきた。プレローの内面のドラマは、すでに検討したサイモンのそれと類似性をもつ。なぜなら二人はどちらもジョゼフを愛し、世間の常識・理解の範囲を越えた同性への愛を生きるのだから。だがプレローの物語はサイモンの物語とことなった展開をみせる。その理由は、プレローが己れの愛になんら期待をいだいていないこと、自らの愛の情熱の不毛性・不可能性を熟知しているという点に存する。サイモンが自己の愛にむなしい希望をもったために悲劇的な最期をまねくのたいして、プレローは自らの愛の不毛性・不可能性を十二分に諒解している。それゆえ、プレローの物語はサイモンの物語ほどに劇的な結末をむかえないのだと考えられるのである。とはいえ、プレローは己れの愛の不毛性・不可能性を知りつつも、愛を生きなければならない。この愛、あるいはこの愛の苦悩が、ジョゼフへの挑戦、そして、ジョゼフを忌避しつつも彼に関心をよせ、ジョゼフを助けようとする一連の行為をもたらすのだ。しかしながら、プレローはジョゼフに内心の思いをなんら伝えることなく別れる。出会いから別れにいたるまで自己の愛を完全な沈黙のなかで、恥ずべき秘密のように生きる。サイモンと同様、告白の不可能性を身をもって生きるのである。プレローの

このようなあり方は、サイモンの場合と同じく、ジョゼフとの宿命的な出会いがひきおこした必然的・不可避的なものであり、要するに、出会い以後の、プレローの生の歩みは宿命的なものであると結論することができるのである。

#### 4. おわりに

私たちは、『モイラ』の中の秘められた物語、すなわち、サイモン、モイラ、プレローの物語を検討してきた。そしてこの検討の過程で、この三人の副人物たちの生の歩みがことごとく宿命的なものであることを指摘してきた。ジョゼフとの運命的な出会い以降、死に追いこまれるまでの、サイモンとモイラの変遷過程は避けられないものであったし、ジョゼフへの愛をうちにかかえながらジョゼフとの別れをむかえるプレローの生の軌跡もまた、必然的なものであった。つまりこれら周辺の人物たちの物語は、中心人物ジョゼフの物語と同様、等しく〈宿命〉の物語として読むことができるのである。そして『モイラ』の中の秘められた物語が〈宿命〉の物語として、主人公ジョゼフの物語と重なりあうという点に、この小説の奥行きと広がり、さらには統一性がみいだされるのである。

ところで、作中、サイモン、モイラ、プレローがジョゼフにたいして愛の情熱をいづくにもかかわらず、結局、ジョゼフに自らの愛を告白しないという事実は、この作品のもうひとつの特徴を考えるうえで重要であろう。サイモンは木蓮の花を贈ることで、あるいは、さいごに自分の苦しみを打ち明けることで、ジョゼフに愛を告白しようとする。プレローは、モイラを殺害したジョゼフに、国外脱出の援助を申し出ることによって「偽装された告白」をこころみる。しかし二人はどちらも内心の思いをジョゼフに伝達し、理解させてはいない。とくにプレローにおいて、告白の不可能性が目立っている<sup>32)</sup>。事情はモイラにおいても変わらない。ジョゼフを誘惑するために彼の部屋に闖入したモイラは、ついにジョゼフへの愛を自覚する。しかしモイラは、ジョゼフに自己の感情をまったく知られることのないままに殺害されてしまうのだ。このことに関連して、モイラが死に先立って友だちのセリナにあてて書いた手紙の行方について言及しておこう。ジョゼフへの愛を確認したこの手紙<sup>33)</sup>は、モイラの死後、ジョゼフが保有し、セリナの手には渡らない。ジョゼフが警察に自首しに行くところを物語った、作品のさいごの頁において、次の文章がみいだされる。

「(…)突然、彼[ジョゼフ]はモイラの手紙のことを思い出した。彼は外套をひらき、片方の手袋をぬいだ。手紙は依然として上着のポケットの中にあった。もしその気に

なれば、手紙をひき裂くことも、近くのポストに放りこむこともできるのだ。立ちどまって考え、彼は手紙を、それがあつた処にそのままにしておくことに決めた。彼の知らない、しかし彼の運命の一部をかたちづくる<sup>ことば</sup>伝言の書かれた手紙を」(II-25, p.193)。

一読して明らかのように、モイラの手紙は投函されない。ましてや開封されることもない。ジョゼフがポケットの奥にしまうことで、この手紙は、少なくとも作品の中では、いわば闇に葬り去られるのだ。こうしてモイラの愛は、ジョゼフにも、セリナにも、他の人びとにも知られず、さいごまで秘密のままにとどまる。投函されなかつたこの手紙は、モイラの孤独性を浮き彫りにしている。サイモン、プレローの愛と同じく、モイラの愛もまた孤独な愛なのである<sup>34)</sup>。しかもモイラの場合、愛する当の相手に殺されるだけに、孤独な愛の悲劇性はいつそう強まっているといえよう。

このようにサイモン、プレロー、モイラは他者との断絶のなかで己れの愛を生きる。『モイラ』の中の秘められた物語とは、秘められた愛の物語でもあるのだ。これら三人の副人物たちにとって、愛することは徹頭徹尾、孤独ないとなみなのである。ここから、彼らは〈宿命〉の物語のみならず、〈孤独〉の物語をも提示しているとみなすことができる。

同じことは、主人公ジョゼフについてもいえるのではないだろうか。この点にかんして、ジャック・プチは『モイラ』の物語内容を要約しつつ、次のように書いている。

「プロテスタントの或る若者があまりにも厳格だが、欲望に取りつかれて、一人の女に屈服し、それから女を殺す。殺人を犯したあと、彼は逃亡しようとする。次いで自分の運命を受け入れ、警察に自首する。しかし同じ事実を別の言葉によって言いあらわすこともできる。ジョゼフ・デイは、内心のはげしさを否認するか、もしくは抑圧する孤独な人間である。ひとつの出会いが自分自身にそのはげしさを啓示する。解放された欲望と悔恨が彼を殺人に導く。そしてその殺人の向こうに、彼はもう一つの、より深い孤独をみいだすのだ」<sup>35)</sup>。

ジャック・プチは、ジョゼフの生の歩みを孤独の深化の過程としてとらえている。たしかに孤立の中でのモイラとの出会い、そして肉体の苦悩と犯罪を経て、ジョゼフがいつそう深い孤独におちいるとする解釈は可能であろう。というのも、モイラはジョゼフにとって、欲望の対象であるばかりでなく、孤独の解放者となるべき愛の対象としての存在であり、それにもかかわらず、ジョゼフはモイラを殺害するのだから。モイラ殺害は愛の挫折をも意味する。そしてこの挫折のあと

に深い孤独が待ちうけていることは、言をまたないのである。ジョゼフの物語もまた、〈孤独〉の物語として読むことができるのだ。したがって、サイモン、モイラ、プレローの物語は、〈孤独〉の物語であるという点においても、ジョゼフの物語と重なりあう。結局、これら三人の副人物たちが、主人公ジョゼフとまったく同じように、〈宿命〉と〈孤独〉の物語を提示しているという点に、小説『モイラ』の深さと広がり、そして統一性がみとめられるのである。

## 註

- 22) 目次の0. 1. 2. に該当する部分は、『『モイラ』の中の秘められた物語(1)』、山口大学「文学会志」第42巻、1991、pp.87-102を参照。
- 23) プレローの早急な出発の意味については、拙稿『ジョゼフを取りまく人物たち(1)ージュリアン・グリーン』の『モイラ』について』の註の12でふれたことがあった。山口大学「文学会志」第38巻、1988、pp.69-70を参照。
- 24) *Le Miroir intérieur, Journal VI*, 24 février 1952, IV, p.1266.
- 25) プレローの挑戦についても、上記の拙稿『ジョゼフを取りまく人物たち(1)ージュリアン・グリーン』の『モイラ』について』のなかで考察したことがあった。註の13、p.70を参照。
- 26) この点については、上記の拙稿、pp.56-57で詳述した。
- 27) *Le Miroir intérieur*, 23 septembre 1950, p.1176.
- 28) ジャック・ブチはプレイアード版テキストの「註」のなかで、プレローのこの態度を問題にし、次のように述べている：「プレローのこの態度を解明するためには、小説の続きの部分で、彼が稀れではあるが介入してくることと関連づけて考えなければならない。ジョゼフが憎しみとみなしているものは明らかに愛を前にしての逃亡なのである」(Jacques Petit : 《Notes》 pour *Moïra*, III, p.1575. 強調は引用者)。
- 29) この若者は、テンレス・マック・ファドンという名の学生である。ちなみに、この学生はカトリックの信者であり、のちにジョゼフは、彼をプロテスタントに改宗させたい願いをデーヴィドに打ち明けている (p.139)。
- 30) デーヴィドがジョゼフの〈守護天使〉たるべき存在でありながらも、実際はこの役割を果たしていないことにかんしては、上記の拙稿『ジョゼフを取りまく人物たち(1)ージュリアン・グリーン』の『モイラ』について』の3. (pp.64-68) で詳細に論じた。
- 31) 拙稿『ジョゼフを取りまく人物たち(2)ージュリアン・グリーン』の『モイラ』について』(山口大学「独仏文学」第11号、1989) の4.(4)、p.109を参照。
- 32) グリーンは『日記』のなかで『モイラ』を評して、「ジョゼフとプレローの物語。それがこの本の真の主題だ」(*Le Revenant, Journal V*, 24 mars 1950, IV, p.1142) と言っている。グリーンがこのように解釈するのは、ひとつには、ジョゼフによるモイラ殺害行為が、ジョゼフ

の《violence》を発現させているという意味で、プレローとの格闘の場面の繰りかえし・蒸しかえしにすぎないからだと思われる。だが、もう一つには、グリーンがジョゼフとプレローとあいだの同性愛的な感情、告白不可能な愛の感情を視野に入れているからであろう。つまりプレローの秘められた物語、不可能な愛の物語は、ジョゼフが己れの感情を自覚しないために発展しなかった、彼のプレローにたいする愛の物語とともに、作品の中心主題をなすと、グリーンは考えているのである。

- 33) 拙稿『『モイラ』の中の秘められた物語(1)』の2.、p.97を参照。
- 34) ただしサイモンの愛だけは、モイラ、プレローのそれとはちがって、周囲の者たちに知られている。サイモンの愛はいわば公然の秘密なのである。しかしジョゼフだけがサイモンの気持ちを理解しようとしなかったために、孤独な愛になるのである。
- 35) Jacques Petit: *Julien Green, 《l'homme qui venait d'ailleurs》*, Desclée de Brouwer, 1969, p.225. 強調は引用者。

#### 参 考 文 献

グリーンにかんする研究書・論考は数多くあるが、この小論の作成に際して、主として下記の文献を参照した(◎印は研究書、○印は小品の論考ないし評論)。

- ◎ Antoine Fongaro: *L'Existence dans les romans de Julien Green*, Angelo Signorelli, Rome, 1954.
- ◎ Jean Sémolué: *Julien Green ou l'obsession du mal*, Editions du Centurion, 1964.
- ◎ Jean-Claude Joye: *Julien Green et le monde de la fatalité*, Arnaud Druck, Berne, 1964.
- ◎ Oswald Muff: *La dialectique du néant et du désir dans l'œuvre de Julien Green*, Keller, Zurich, 1967.
- ◎ Jacques Petit: *Julien Green, 《l'homme qui venait d'ailleurs》*, Desclée de Brouwer, 1969.
- ◎ Jacques Petit: *Julien Green*, coll. "Les écrivains devant Dieu", Desclée de Brouwer, 1972.
- ◎ Jean-Pierre J. Piriou: *Sexualité, religion et art chez Julien Green*, Nizet, 1976.
- André Blanchet: 《*Moïra* ou le nouveau roman chrétien》, in *La Littérature et le spirituel II, 《La Nuit de feu》*, Aubier, 1960.
- 原田 武: 『ジュリアン・グリーン sensualité について』、大阪外国語大学フランス研究会発行 *études françaises*、第8号、1968.
- 遠藤 周作: 「情慾の深淵」(『カトリック作家の問題・宗教と文学』所収)、「遠藤周作文学全集」第10巻、新潮社、1975.
- 遠藤 周作: 『キリスト教は肉欲を否定するかー「モイラ」をめぐる一』、主婦の友社版『モ

イラ』への〈解説〉、「キリスト教文学の世界1 J.グリーン ジッド」所収、1977.

- 鹿島 晃一：『『モイラ』論—恣意をこえる存在の影—』、上智大学フランス語フランス文学学会発行*Les lettres françaises*、第3号、1983.
- 長戸路信行：『ジュリアン・グリーン—『モイラ』の模様—』、千葉敬愛経済大学研究論集、第24号、1983.
- 浅野 雅生：『Julien Greenの《Moira》論』、帝京女子短期大学紀要、第4号、1984.
- 長野 督：『『モイラ』の感覚描写』、早稲田大学大学院「フランス文学語学研究」刊行会発行「フランス文学語学研究」、第8号、1989.

[付記] 作品からの引用に際して、福永武彦訳『モイラ』(人文書院版「ジュリアン・グリーン全集」第四巻所収)の翻訳を参照させていただいた。